

だ。日本で聞いていたソ連とは……あだたいぶ違う。二度と会うことはないだろうが……。私は帰り支度のため再び収容所へ帰った。

今はロシア。あのシベリアの人たちは今ごろどうしているだろう。コルホーズで日本に一度来たいと言っていた娘たちは日本にこれただろうか。涙で怒るのはつらいと言った、あのジッコウフは故郷の母と一緒に暮らしているだろうか。ノウバヤの青鬼さん！ ムノウガー、ムノウガー、ロスイダーニア、ロスイダーニア！

あれからはや五十余年。私は故郷に帰れて本当に幸せだった。戦友会も去年は宮崎、今年は京都、来年は伊良湖（渥美町）で十六回目。戦友たちは集まりを楽しみに夫婦同伴でくるものも多い。

だが親、兄弟、妻子の待っている故郷に帰れず、異国の地に眠る何万人かの人々。お互い励げまし、助け合っていれば幾人かの人が必要帰れたはずだ。

再び尊い命を奪い合う、軍国主義をくりかえさない

よう願って。

## 終戦から平壤・

### 延吉への手記

愛知県 外山 浅一

私は昭和八（一九三三）年八月、豊橋歩兵第十八連隊水谷主計大尉の推挙で建設要員として単身満州に渡り、関東軍経理部に軍属として採用され、経営科国有財産係として、軍の建設した建造物整理のため、全満各地に出張しておりました。

昭和二十年八月九日、ソ連越境戦争、八月十五日、関東軍司令部の移駐予定地の通化で終戦を迎えました。この通化で現役軍人と別れ、私たち非戦闘員である軍属は平壤（ピョンヤン）に疎開した軍司令部職員家族の援助に向かいました。八月末、平壤にソ連進駐と共に北朝鮮は独立し、私たちは平壤刑務所に収監されました。

ソ連軍越境参戦（この時の手記は『平和の礎』第七巻に所載）、その後間もなく終戦。それから昭和二十一年の正月、着いたところは延吉捕虜収容所であった。

#### 平壤に設けた疎開本部

通化で終戦の玉音放送を耳にしても、まだ敗戦の経験を知らない私たちには、これからの日本がどうなるのか、まだ敗戦の実感すら湧かない。その夜幹部の協議により、現役軍人は全員指揮者の指示に随って、元の関東軍司令部に帰還することになった。私たちは別行動をとり平壤に疎開している職員家族のところへ向かうことに決定した。そして新京（長春）を出る時に中央銀行から持ち出した現金を、取り敢えず、半年分の給料前渡しということで拇印で受け取った。

通化で平壤に向かう列車を編成した。この列車には援助に必要な物資を満載した貨物に、私たち軍属を乗せた貨車を連結した。随分長い列車である。従ってスピードも最低、夜間は電灯も無い真つ暗闇の貨車の中では人声だけが騒々しい。

機関車はいかにも難儀そうで、蒸気を吐く音が、息のつまるように聞こえて来る。その内に空蒸気だけを吐いて、列車は進行方向とは逆に後戻りしている様子、高い峠を乗り切れずにバックしているのだ。しばらくバックして列車は停止したかと思ったら再出発。

かなりのスピードで登ったようだが、機関車の車輪が空回りしていてまた駄目。停止したと思ったらまた後に戻されている。今度はかなりの距離をバックしたようだ。

機関車も苦しそうだが、機関手もこの真つ暗闇の山道、何とかして登りきろうと、焦っている様子が見えるようだ。真昼なら皆降りて押してやりたいところだが、この暗闇ではどうしようも無い。機関車のことは分からないが、自動車ならギヤの入れ換えと言うところだろう。三度目だ今度こそ、と恐らく車ならギヤはロウに、その上かなりバックしているので相当のスピードで加速すれば、何とかなるかもしれないと思っ

ていたら案の定成功だ。  
こんな車中の思い出を残しながら列車は暗闇の中を

走り続けた。列車は出発してから丸一昼夜位かかって、やっと目的地平壤に着いた。

その夜は貨車で寝た。一夜明けて見ると広い平壤の駅構内の引込線には立錐の余地も無い程貨車でいっぱいだ。いろいろと状況を調べてみると、当初二、三日の予定で戦火を避けるつもりで疎開が次第に情況が変わり、それでも再び元の住家に戻るには、余り遠く離れない方がよいと、最初に出発南下したグループは鴨緑江リョウキョウを渡らずに鮮満国境の安東に疎開した者も随分いるらしい。次ぎから次ぎへと入ってくる疎開列車にもう安東には収容できなくなり、止むを得ず鴨緑江を渡り新義州に疎開した者もいる。

それでもまだ疎開列車は次々南下してくる。新義州に疎開列車がいっぱいになると、また次ぎの駅と、平壤まで駅構内引込線はいっぱいで、街中に収容できない疎開者は貨車の中で寝起きしている。

その後に来た疎開列車はもう平壤には収容できないということ、泣く泣く南下し三八度線を通過した者は、その年の内に故国の土を踏んで、却って幸いな結

果となった。

安東はじめ北朝鮮各地に疎開した者は、それぞれの立場で苦難の毎日が始まったのである。平壤に着いた私たち一行は、平壤駅内に疎開本部の立看板を立て、それぞれ疎開家族の疎開先を調べて回った。次々調べて回る内に、私の家族と妻子供三人は港町回船問屋の倉庫にすることが分かり、新車で別れて以来十日ぶりの再会で、お互い無事であることを心から喜びあった。

以来私も家族と同居することになった。そこから毎日駅前の疎開本部に向き、まず疎開者の必要な食料や被服の調達に専念した。

敗戦したというものの、昔のまま服装は元の官服を着て、腰には軍刀を帯刀している。街を出歩くにも電車をはじめ乗り物は無料で、戦前の威厳を保っていたので作業に不自由ない。

陸軍糧秣庫から、お米・味噌・砂糖から塩にいたるまで、好きな物資が調達できた。駅前広場に大きな軍用天幕を張り、この中にあらゆる物資を山積みした。

軍属はそれぞれに作業を分配し、一日の作業が終わると、甘党には新品の軍用靴下に小豆をいっぱい、そしてもう一つの靴下に砂糖をいっぱい詰めて持ち帰らす。また辛党には四斗樽の鏡を割った酒樽から、飯盒にいっぱいの酒を掬って持ち帰らす。こんな毎日が二、三日続いた。またある日は、平壤市街地から十数メートル離れた軍用集積場に、朝鮮米が大量に集積してあることを知り、平壤駅長に強引に交渉して、機関車に二輪の貨車を集結し、十数人の作業員と共に、引込線を集積場に向かった。

現場について驚いたことは、山と山に挟まれた台地に集積場ができており、鉄道枕木を並べて、その上に吠に詰めた道米が山と積まれ鉄道用のシートで覆われている。こんな小山が数え切れない程並んでいるではないか。食料が無いと戦時中二合三勺の耐久生活を強いられていたお米が、敗戦の今日こんなにも残っているとは本当に意外でした。恐らく平壤の人口の五年位は賄えるだろうとの噂であった。私たちは汗まみれに貨車に詰めるだけの吠を積んで平壤に戻った。

早速に各疎開先へ連絡し配分したが、私の宿にしている倉庫には三、四十人の疎開者がいる。重いお米をどうして運ぼうかと思案していたが、ちょうど都合良く、赤い牛で荷車を引いて通りかかった朝鮮人を見付け、お米一吠お礼に出すという条件で交渉が成立し、ようやくの事で十数吠を港町の倉庫まで運び込んだ。

ところが普段お米の無いはずの倉庫に十数吠のお米を持ち込んで、見付けられれば大変なことになると思い、どう始末するかまた一苦勞である。取り敢えず倉庫内に残っていた外の荷物や吠の間に、なるべく人目につかないよう分散して始末した。

八月二十五日か二十六日、判然としないが、早朝まだ薄暗いのに、私たちの住家である倉庫裏の大同江に架かる大きな橋の方向から、ガラガラとものすごい音が聞こえてくる。何事かと窓から橋の方を見てびっくり、まだかつて見たことのない大型戦車が、本体の二倍もある長い大砲を前に向け前進してくるのが、震に浮かんで見えるではないか。その時初めて私たちの運命も、もうこれまでと直感した。そしてこのすさまじ

い轟音が早朝から昼頃まで続いた。

午後には街中がソ連兵一色で、街の角々には数人のソ連兵が立って、何事か話し合っている。もううかつに外に出られないと覚悟した。ソ連軍が進駐した翌日には、日本軍の被服廠から持ち出したと思われる軍服を着て、軍靴・巻脚絆など日本兵そのままの服装をした若い朝鮮人数人が、歩兵銃に銃剣を着け、治安隊と称した一団となり、拳銃・刀剣等あらゆる武器を取りまとめて持ち去った。

これで本当に武装解除されたことになった。その後時々一人二人の治安隊員が来ては女子供の寝ている枕元を土足のまま、武器を隠し持つてはいないか、また危険物を持つてはいないかと脅かし、僅かな荷物を暴き、それまで物資に欠乏していた反動か、タオル、石鹼等、欲しいと思つたものを見つけ次第持ち帰る。この事について女子供は非常に怯えていた。しかしこれには一言の文句も言えない。相手は武器を持つてゐる。

その上、治安隊員に危害を加えたり殺害でもしよう

ものなら、十人の日本人を殺す。いや二十人、三十人と、いろいろなデマが私共疎開者仲間に流れている。手も足もでない。私共の間では治安隊どころか常に「不安隊、不安隊」と言っていた。

通化で前払いとして受領した満州国幣の給料も、平壤では通用しないので、幹部が平壤到着と同時に全部回収し、朝鮮銀行に持ち込んで、軍用金であるとの名目で、強引に交渉、銀行にある現金の殆どを交換して持ち出し疎開者に配布してしまつた。

それ以来、銀行は取り付け騒ぎ、平壤住民のいかなる大口預金者といえども、通帳・印鑑を持参して払出を要求しても現金が無いとのことで誰一人支払つてもらえない。在壤住民は無一文でお金に苦労しているが、疎開家族は皆充分現金を持つてゐる。この現金こそ命の綱、金さえあれば何とかなると命がけで護るところがこのことはすぐに公になり、そのためにこの金を隠すことに必死となり、みんな数カ所に分散して安全確保に努めた。

私の場合数個に分けて油紙に包み、その一つは屋根

裏に、また裏にある大きな塵箱の底に、そして塵箱が  
いっぱいになり片付ける前に回収してまた入れ換える。  
非常用には、安全を期するため、裏に流れる大同  
江の一キロも続く川岸の高い石垣の穴の奥に密かに隠  
す。このようにした者は私以外にも大勢いた様子だ  
が、この金は恐らく今も尚そのままであるはずだ。

いろいろと思案のあげく考え付いた一つに、私には  
病弱の三男がいて誕生過ぎてもおしめ無しでは過ごせ  
ない。取り換えた汚れたままのおしめの中に隠し、  
次々とおしめの取り換えの度に入れ換えてゆくのだ。  
このようにあらゆる手段・方法で確保に努めたが度重  
なる検問で次第に手持ちも少なくなる。

私たちは常に連絡を取り合い、情報の交換に努め  
た。ソ連では十五歳以上四十五歳までの日本人男子  
は、すべて軍に籍がある者と見ている。これに該当す  
る者は、見付け次第どこへか分らないが連行してし  
まうという。そうかと言って女子は用事があっても外  
出はさせられない。ソ連兵にいつ暴行されるかもしれ  
ない。私たちは軍隊色あるものすべてを焼却し、長年

の功績で手にした勲章記章も箱入りのまま石を重し  
に、早朝涙と共に大同江に沈めてしまった。

黒ずんだワイシャツに、半ズボン、鼻髭を伸ばし首  
に手拭いを巻き、朝鮮人労務者と見分けの付かないよ  
うな格好で外出することになっている。それでも心配で  
履物は絶対に靴ズックをはかない。鼻緒の切れかけた  
すり切れの下駄か草履、同僚の中にはわざと足に切り  
傷を付け、包帯に血をに滲ませ、棒を杖がわりにビッ  
コで出かける者もいた。

私は三男の病状が余りにもひどいので見るに見兼  
ね、せめて一度だけでも、医者に見せ薬でも飲ませて  
やりたいと、かねて調べておいた山手通りの赤十字診  
療所へ連れていく決心をした。出で立ちは朝鮮人労務  
者姿に身をやつし、三男を背負い、そのうえやつれた  
長男・次男の二人を連れだし、両手で二人の子供の手  
を引きながら山手通りに向かった。随分の道程であ  
る。

その道中意外なポスターを見て、何とも言いようの  
無い遣る瀬ない気持ちがあった。雨戸一枚位の大きなポ

スター。字は一字も書いていないが絵を見て一目で分かる大きなソ連兵が、跪いて両手を差し出している。北朝鮮兵に朝鮮の国旗を渡そうとしている絵。三色刷りで中々良くできている。淋しいことには、そのソ連兵の踏み付けた靴の下には、日の丸の日本国旗が地に落ち、その日の丸の真ん中の赤地を、しっかりと踏みつけているではないか。

赤十字の旗を立てた診療所では注射器も無く、また飲み薬ももらえなくて空しく帰った。ある日突然町内会の責任者からの呼出しで、男子全員鎌か包丁、無ければどんな刃物でも持って集合するようにと声がかかった。何をするのか不審に思っていたら、飛行場に連れて来て、片手間隔に並び伸びきった草刈りをさせられた。飛行場の片隅には何十機というミグ戦闘機が整列、その翼の下で赤い毛布を敷き、男の飛行士と女の整備士のペアが仲睦まじく話し合っている姿を見て、当時の日本軍では想像もできない異様な感じがした。

次ぎ次ぎ耳にする情報には、乗馬したソ連兵に胸の

ポケットに差した万年筆を見付けられ、この馬と交換しろとか、腕巻時計欲しさにトラックと交換しろと、冗談のような話もしばしば耳にした。それでも要領の良いソ連兵は万年筆を手に入れ、腕には二、三個の腕巻時計をしている兵隊もいた。当時スマートなスイス製のものより、カチカチと音の響く国産のものを喜ぶと言うことだった。

市内の所々に警戒勤務をする下士官、兵の駐屯地がある。十数人で交替勤務をする巡察将校が、乗馬で定期的に勤務状況を視察して回る。あるとき巡察将校が回ってきて駐屯所前の街路樹に馬を繋ぎ家の中に入る。下士官の号令で敬礼して勤務の状況など報告する。しばらくして将校は繋いだ馬の所へ戻ってみると、つい先ほど乗ってきた馬の鞍が無くなっている。

下士官が兵に命じ捜させたが、いくら捜しても見つからない。止むを得ず将校は萎れた姿で裸馬にまたがり引き揚げていく。兵は将校の立ち去った後で、例の鞍を持ち出し、鋏・ナイフで切り刻んでいる。隠した兵隊が捜しているのだから出てくるはずがない。どうす

るつもりかと見ていたら、それぞれ兵隊の持っている腕巻時計のバンドがひどく痛んでいたので、取り替えるということらしい。信じられないような話だが、事実であるとは何回か聞いた。

日が経つにつれ、街でソ連兵の暴行、強姦の話をしればしば耳にするようになった。私は同じ経営科内の筆生、タイピスト等二十人近くの女子軍属の世話もしていた。ソ連兵の暴行から逃れるため、髪の毛を切って男装している女性もあるという。もしソ連兵が来たら、私の子供を抱いて人妻のように見せよと注意した。

農家の納屋にある女子軍属には、昼の間は幾ら騒いでも良いが、日が暮れて夜になったら、中二階に上がりはしごを引き揚げて、ネズミと一緒に夜の明けるまで静かに休むようにと注意した。ところがすぐその翌日、ソ連兵が近くの朝鮮農家に、夜の明けるのを待って、寝ている夫婦を起こし主人を縛り付け、その目の前で拳銃を片手に強姦して帰ったという。いろいろと情報を聞いてみると、ソ連兵は日本兵と反対で暗闇の

中には絶対入ってこない、見通しのきく明るいところでないに入ってこないということが分かって、私の考えの間違っていたことに気付いた。

街ではソ連軍のトラックに朝鮮人が乗り込んで、日本人の男を見付けると「ジャボンスキー」と呼びトラックを止める。トラックから大きなソ連兵が二、三人飛び降りて、両手を持ちトラックに引き上げてどこかへ連れていってしまう。ソ連兵から見ると日本人も朝鮮人も見分けが付かないらしいが、朝鮮人から見ると日本人は一目で分かる。この朝鮮人はソ連から、うまい汁でも吸っているのかもしれない。こんな事があるうちで毎日おきている。私もいつか同じ運命を辿るだろうと、落ち着かない不安な気持ちで一日一日を過ごしていた。

ある朝、町内会の責任者から呼び出しがあった。十五歳以上四十五歳までの男子全員である。整列すると迎えに来た朝鮮人に引率され、連れていかれた先は、赤煉瓦の高い塀に囲まれた刑務所であった。



## 平壤刑務所

九月の初め危篤状態の三男、榮養失調の長男、次男の三人の子供と妻を残し、さようならと、どこへ行くのか行きさきも言わずに、刑務所入りとなってしまうた。私は生まれて初めて刑務所の門をくぐった。まず最初に連れられていったのが、身につけていた衣料その他を格納する倉庫の前だった。一行四、五十人は整列して注意を受け、身につけていた衣料を全部脱ぎまといめた。

私は昭和八年初めて渡満する時、伯母より肌身離さぬようにと言って、成田不動金龍山浅草寺のお守りを腰に持っている。それ以来一度も体から離したことがない。

関東軍経理部十三年の在満勤務、ある時は乗っている列車が正面衝突、またある時は脱線転覆等の重大事故に直面しながらも、このお守りのお加護か、いつも無事であったことを思い、今ここで手放すことは実に残念であるが止むを得ない。再び手元に戻るであろうかと、そんな事を心配しながら衣類の真ん中に巻きつけ

て紐を掛け、荷札に名前を書いて付けた。皆パンツ・禪まではずしてそれこそ素っ裸である。あさぎの蚊張のような着物を一枚ずつ配ってくれたので早速着てみた。

背の高いノッポのところは膝小僧までしかない短いのが渡り、そうかと思えば背の低い者に、足の先まで隠れるような長いのが渡ったので、当人同士話し合ってお互い交換しようとしたら、ものも言わず後から竹刀でぶん殴られた。

私は標準型でちょうど良かったが、この雰囲気を見てこれが刑務所の姿かと驚いた。蚊帳のような薄い着物は着たが、いつまで待っても腰紐はもらえない。無意識のうちに前を合わせて両手で押さえた。この状態は出所するまで続いた。刑務所内では氏名は一切使わず、私は確か三七五号であった。番号を付けられた各監房に振り分けて収監された。私たちの監房は広さ畳三畳位の部屋で、片隅に小形の風呂桶位の便槽が置いてある。この部屋に七人収容だから本当に満員である。夜寝るにも上を向いて寝る余裕がない。頭と足を

交互にして体は横向きでないと余地が無い。こんな監房生活が何日も何日も続いたのである。

単調な毎日が続くので、月日の感覚も忘れてしまうというので、当初房内の板壁に入所来の月日を爪で刻み込んだが、それも五、六日しか続かなかつた。

食事は一汁一飯でそれも粟と麦ばかりである。一汁の汁はほとんど塩味で、時には味噌、醬油味のこともある。汁の中には大根や野菜が少々入っているが、飲んだ碗の底には赤土がいっぱい沈殿している。恐らく野菜は畑のままか洗っても上から水をかける程度の洗い方と思った。それでも空腹を満たすため美味しく食べた記憶がある。

入所して二、三日頃から毎夜のように、前に述べた治安隊と思われる何人かが刑務所に来て名前を呼んで何房はいるか、いたら部屋のホチキスを降ろせと大声で叫ぶ。ホチキスというのは、房内から押すと、その房の番号がおおりて廊下から見えるようになっていた。呼んだ本人が見つかると房から出して放射線に分かれた廊下の真ん中で「おまえは警察官を何年勤めておっ

た」「何に十五年も勤めておつたのか、お前は朝鮮人を二合三勺で苦しめた事覚えていたら」と。

「朝鮮人の闇（統制物資の取引）を何人挙げた（檢舉）十五年も勤めたならその倍の三十発殴ってやる」と、刑務所備え付けの七つ道具を使って力限り殴打する。その音がビシツとか、パチンと静まりかえつた刑務所内に響き渡る。特に現場のすぐ近くの房にいる私たちの耳には目に見えるように聞こえてくる。最初の二、三発は歯を食いしばって我慢しているように見えるが、四、五発ともなればもう我慢しきれなくなり異様な悲鳴を挙げる。この悲鳴を聞いている私たちも生きた心地はしない。これが三十も続けば死んでしまうかもしれないと不安な気持ちに襲われる。

ところが殴打するのは一人だけでなく、数人いると思われる他の者までが「俺も三十だ」とまた殴打を続ける。これが本当の生き地獄だと思った。次ぎに呼ばれたのは学校の先生だ。「お前は朝鮮の子供を叩いたり叱つた事があるだろう。先生を何年しておつた」「それならその倍の幾つ」と前と同じような仕打ち。

裁判所の検事から判事、平壤で著名な有名人にまでこの制裁が及んだ。制裁を受けた者の中には一生直らない不具者となり、軽い者でも顔から手足、見る目も覆うばかりの痣だらけ、新品の軍靴で踏み付けた鋸の跡が蜂の巣のように顔や胸に残っている人を後日作業に出るようになって、見かけたことがあった。これらの制裁は今考えれば、長年虐げられてきた朝鮮人の怨みが、この時とばかり一挙に爆発したのかもしれない。

それにしても、朝鮮には縁の薄い私たち満州からの疎開者は、朝鮮の子供をいじめたり、叩いたりした事など一度もなく幸いであった。房内では座ったまま、日の明け暮れを待つ単調な毎日が続いた。その内に何か取調べでもあるのではないかと、不安にかられていたが一向にそんな気配もない。日が暮れ寝る時間が来ると、時々夢幻に危篤状態であった子供が死んで皆で大騒ぎしている夢、妻や子供が死んで、自分が独りぼっちになった夢、また時には家族揃って故郷に帰った懐かしい夢を見たこともある。

寝ていても熟睡することはほとんどない。夜が明け

て座っていても、寝不足で睡眠の延長、夢幻に国の両親の事や、家族妻子の消息など走馬灯の如く頭の中を駆け巡る。そんな虚ろな時、見回りの看守の靴音が幽かに聞こえてくる。

吃驚して七人の同僚と共に正座して二列に並ぶ。もし自分たちの監房の前で看守が止まれば直ちに誰か一人が、「気を付け」「敬礼」と号令をかける。すると何、国語を使えと叱られる。国語と言えば私たちの国語は日本語であるが、敗戦して朝鮮建国の今日、平壤刑務所では朝鮮語を使えということである。私たちの房には朝鮮語を話せる者は一人もいない。返事もできず黙っていると、下の食事を差し入れる小窓から一人ずつ手を出せと言う。言われる通り手を出すと、腰に釣下げた櫂の棍棒で、思い切り骨でも折れたかと思われる程強く打たれる。

そして「気を付けはキッチョ、敬礼はキョネン」と教ええられる。前列一番目に座った者が番号と号令をかける。これも国語なら、一二三の番号で、英語のワン、ツー、スリーや、中国語のイー、アール、サン、

スーなら日本人誰でも知っているが、朝鮮語は余り必要を感じなかったので一言も分からない。命がけで覚えた朝鮮語の番号も咄嗟の場合には自分の番号を忘れ、例の棍棒で飯碗も持てない程の強打に二度と再び忘れまじと、房内での国語を覚えた。この看守もつい先頃ソ連軍の進駐まではこの房の中のいた囚人だったと言う。この刑務所看守のほとんどがかつての囚人でこの刑務所にいたと言う。自分たちの受けた仕打ち通りを忠実に、勤務交替して新入りの私たちに仕返ししているようなものだ。

この所長も共産主義の幹部で、二十数年の長きにわたり、刑務所で服役していたと言う。

監房に入って半月位した頃から時々房外で作業するようになった。作業する時は、脱衣室で着ている着物を脱いで素っ裸となり、別の部屋へ行き作業服を着用する。作業服は浅黄の薄い、シャツとズボンだ。刑務所内での作業は新割りから草取り、庭掃除等である。ある時所長室の掃除をしたことがある。雑巾掛けか

ら、整理整頓、部屋の真ん中に大きな火鉢があった。その中を掃除していたら半分も吸っていない煙草がたくさんあった。この時程一口吸ってみたいと思ったことはない。

作業が終わると作業服を元の部屋で脱ぎ、素っ裸になり、今度は数人の看守の見守る前で障害物競争のハードルのようなものを、両手を高く挙げ自分の番号「三七五」を大声で叫びながら飛び越えて、監房着の置いてある部屋に戻る。この部屋に入って吃驚したことは煙草の香りがツーンと鼻をつくではないか。先ほどの所長室の火鉢の中から誰か吸い殻を持ち出し、その上マッチまで持ち込んで一服したのである。

あれ程嚴重な検査を潜って、どうして持ち込んだのか不思議でならない。この匂いが看守にでも発見されればそれこそ大変なことになると、一同心配していたが、その時は大事に至らず安堵した。

時には刑務所外の作業もある。畑での作業、野菜その他食糧品の運搬等で、私も一度外の空気を吸ってみたい。外部の状況がどんなに変わっているか、この目

で確かめてみたいと念願していたが、その機会には一度も恵まれなかった。

この刑務所外にソ連兵の服役者がいるの見て意外に思った。彼らは恐らく、掟を破って何か悪いことでもしたのだろう。

刑務所内での思い出も随分いろいろあったが、細かいことは何も覚えていない。監房内にいる時間が長く、単調な毎日が続き、約三カ月余、ただの一度も取り調べということもなく、十二月上旬には他の収容所に移されることになった。入所の際案じていたお守袋も無事に手元に戻って安堵した。

平壤から延吉へ

十二月初め予告なしに監房から出され、最初入所した時着ていた衣類を脱いで収めた倉庫の前に整列させられた。そして一人ずつ自分の衣類を渡された。間違はなく自分でまとめて収納したそのままであった。私はすぐ紐を解き中にくるんでおいたお守袋を探してみたらこれもそのまま手に戻って安堵した。

入所した時は秋口とはいえ残暑の厳しい暑い日であった。十二月と言えば、かなり寒いはずなのに、入所当時の夏衣類を着ていても寒さのことは、刑務所を出られたと言う喜びが大きかったせいも記憶にない。

数十人だったと思うが刑務所の赤煉瓦を後に、どこに連れていかれるのか分からないまま歩かされた。体力のない私たちにどこまで歩かせるのかと思いつながら歩けどなかなか目的地には着かない。やつの思いで着いたのが、有刺鉄線を二重三重に、張りめぐらした捕虜収容所である。

この収容所は随分広大な地域で「三合里収容所」と言っていた。何千人いや何万とまではいかないまでも、相当の捕虜が収容されていた。特別に作業はしないが、一部の者は収容者の食糧準備などをした。ここでも食料は乏しく常に空腹に悩まされた。ほとんどの者は、暇まかせに缶詰の缶を探してきて、糧秣倉庫附近にこぼれている大豆・高粱・とうもろこしなど一粒一粒丹念に拾い集め、焚火で炒って食べるのが唯一の楽しみでもあり、日課でもあった。

この收容所の管轄はすべてソ連軍であり、また勤務しているのもソ連兵である。收容所内にソ連兵の将校や兵の宿舎もできている。ある日将校宿舎のベチカの掃除を命じられた捕虜がいて、丁寧に掃除をした。その夜ベチカに薪を入れて点火して燃え上がったところ、煙突内に煤が詰まっていたのか排煙ができなくて、そのうち火力が強くなり空気が膨張して、音響と共に煤煙が火の粉ともに、部屋中に飛び散ってしまった。

翌日、その捕虜は爆薬を仕掛けたという言うことで、大勢捕虜の見ている目前で銃殺されてしまった。この收容所に入って間もなく、服装は旧日本軍の軍服が支給され兵服に統一された。時あたかも真冬だというのに夏服である。多分冬服は朝鮮人に接收され員数がなかったのだろう。夏服に外被（外套と同じ仕立ての雨合羽）を不着ずつもらって一冬を過ごすことになった。

この收容所は部隊を編成して、ソ連領に送り込むためのものであったかもしれない。ここに入って数日

後、私たち仲間の間に色々のデマが流れた。日本に送還されるとか、いやソ連に連行、重労働させられるとか、それぞれの運命にかかわる重大問題なので真剣な討議が交わされた。そうしたある日突然集合を命じられ、所持品その他の検査があった。まず地図類・磁石・コンパス・小刀等は絶対に持つてはならない。これらを隠し持っていたら処罰されるということだ。

その夕刻、数百人いや千人近くいたかもしれないが、捕虜部隊の編成が終わり、ソ連兵の指揮・引率の下に收容所を出た。薄暗くなった郊外から次第に市街地の方に近づく。街にはまだ私の家族もいるはずだ。しかし誰もが何を考えているのか黙々と歩く。街の中央を通り抜けて、平壤の貨車ホームに着いた。ここで長く連結された貨車に詰め込まれた。十五トン車一車両に、七、八十人は乗ったと思う、健康な者は数少ない。ほとんどの者が栄養失調か半病人である。

私たち一行の中には平壤に家族を置きざりにして来た者も随分いるはずだ。私もその一人、その後の家族の消息は全然分らない。危篤の子供は死んでしまっ

ただろうか、他の子供は無事であるだろうか、など走馬灯のように頭の中を駆けめぐる。もしシベリアでも連行されれば、家族のいる平壤には二度と戻ることはできないだろうと、淋しい思いで胸が詰まる。

後で知ったことだが、平壤に残した家族は、ほとんど女子供であるがお互いに連絡を取りながら、この駅から毎日のように何れかへ送られる自分の親や夫に、一目会いたいと部隊の通るのを交替で見張り番をし、連絡を取りながら捜したと言う。

ここで本文を中断し、引揚げ後、妻から聞いた当時の状況を付け加えてみたいと思う。

毎日のように平壤から貨車で送られて行く捕虜部隊を見て、平壤に残されている家族妻子に最後の別れとなるやもしれぬと、朝鮮人農家の手伝いや製菓工場のアルバイトで稼いだ僅かな小遣いで、煙草・飴玉等を買って求め、捕虜部隊移動の都度、私を捜し回ったと言う。妻の場合最も条件が悪い。危篤状態の三男の外に二人の子供を抱えている。私が刑務所にいた三カ月有

余の間に、疎開家族の状況はすっかり変わってしまった。と言うのはソ連軍進駐以来、次々と条件の良い建物や施設を接収して、疎開家族はその都度条件の悪い倉庫や納屋、そして日本人家族の狭い一室に閉じ込められてしまったからだ。

私の家族は、日本人家族に私と同じ経営科の女子軍属を含め十数人と同居したと言う。最初は二部屋を借りて生活していたのが、女子軍属の一人が生活の苦しさ辛さに耐え兼ねてソ連将校の情婦となり、床の間付きの大きな部屋を独占してしまった。食べ物も自由になる生活は楽になる。しかしその贅寄せが他の者全部に負わされた。小さな六帖に全部の者が押し込まれてしまい、夜など横になって寝ることもできない。一部の者は壁にもたれて寝たと言う。

そんな状況の中に三人の子持ちの家内など、割り込む余地もない。その上、瀕死の子供を常に背負っている。ちょっと背中から降るせばヒーヒーと泣く。独身の女性や子供を持たない人妻では親の心情は分からない。子供が泣けばうるさくて眠れないと苦情が出るの

で、止むなく寒空で暗夜の夜道を行きつ戻りつ歩きながら仮眠したと言う。こんな日が一カ月余り続き、一度も子供を背中から降ろして寝たことがないと言う。不幸にして、この子供は間もなく家内の背中で亡くなったと言う。

女子軍属の中の親切な女性二人が亡くなった子供をみかん箱に詰め火葬して来たと言って、小さな小箱に骨を納め持ち帰ってくれた。白布で包んだままの骨箱は大事に郷里へ持ち帰り、懇ろに葬むって供養した。

三十数年後その女性に、岡山で面会する機会ができたので、詳しく当時の状況を聞いてみたら、亡くなった子供はみかん箱そのまま火葬場に置いて来た。その代わりに、その場の土を一握り骨箱に納めて持ち帰ったと言う。当時の状況では止むを得なかったかもしれないが、この話を家内に知らせたら、余りにも落胆していたので、知らせなかった方が良かったかと、いまだに後悔している。

ここで本文に戻ります。

以上のような状況の下に、妻は病弱な子供を背に二人の子供の手を引きながら、一目私に会いたいと来る日も来る日も何回となく捜し回ったが、縁無く私たち夫婦は会わずじまいに終わってしまいました。

そして私たちの乗った貨物列車は十二月二十日夜半、平壤の駅を出発しました。出発してからの車中は大変なものでした。全員が座る余裕がないので交替で座り、一部の者は立っている。その上高熱で座ることもできない重病人が出て、二人三人分の席を取ってしまう。中には下痢で腹を押さえて我慢しきれずたれ流しの者もいる。

それでも列車はお構いなく走り続ける。各貨車の扉には外から施錠しており、びくともしない。四、五時間走ると列車は名も知らぬ駅で停車する。最後尾に連結した客車に護衛のソ連兵が乗っていて、機関銃（小形で俗にマンドリンと言っていた）を肩に施錠を外しに来る。この時を待ち切れず、われ先にと貨車から飛び降りて、貨車の下にもぐり込んで用便をする。この列車はスピードも遅いが、停車の時間も長い。一日



走っても距離は幾らも進んでいない。平壤を出発して二、三日頃から、各貨車共病死する者が一人ずつ出て来た。列車が止まる度に貨車内から亡くなった死体を車外に持ち出し、貨車の屋根の上に縄で縛り付ける。

どこへ行くのか一週間経ってもまだ目的地には着かない。列車が停車する度ごとに、秀吉の千成瓢箪ではないが、屋根の上の死体が一体ずつ増える。

列車が発車して間もないのに、車内では用便を我慢して列車の止まるのを待つ者が多い。待つ時はなかなか止まらない。その上ソ連兵も横着になり列車が止まっても二回に一度位しか施設を外してくれなくなった。これでは大変だと皆で思案の揚句考えたことは、貨車の四隅天井際に四〇×六〇センチ位の通気窓がある。ところがこの窓には盗難防止のためか、横に二本の鉄棒が張ってある。下の棒を少し「く」の字を横にした形に、下に曲げることができたら、充分出入りできると考えたが、残念なことに何一つ道具がない。ただ人力に頼るしかない。そこで唯一の手段として、皆の腰紐・バンドを下の鉄棒の真ん中に結びつけ、五

人、十人、いや人なら二十人でも三十人でも間に合う。大勢で渾身の力を振り絞って引き下げた。意外と簡単に曲がった。

早速停車の機会に実行してみたら案内係に出入りできる。窓から飛び降り貨車の下にもぐり、用便を済ましてまたよじ登ってくる。私も何回かこの窓を利用して本当に助かった。それでも体力の弱った者では困難であるし、また列車の走行中では何ともならない。そこで考え出されたのは、貨車の床に穴を開けるといふことだ。床は檜の木か檜の木、いずれにしても堅木でその上厚みがある。こんな床に道具無しで、どうして穴を開けることができるものかと思った。しかし大勢おれば色々知恵者もいる。

どうして持ち込んだのか、折りまげの小刀を持っている者が二、三人いた。五寸釘を持っている者もいた。人力は幾らでもある。

一昼夜二十四時間制で作業に取り掛かり、遅々とした作業ではあるが、人の執念は恐ろしいもの、不可能と思った穴が貫通した。五、六センチ角の穴である。

貫通してみると零下に凍りついた外気が、車内に白煙のように吹き上げて来た。

満員の車内は人の体温と、吐く息でかなり温度が上がっているからだ。貫通と同時に、待ち切れない下痢患者はこの穴に肛門をあて、汚さないよう用便をする。

もし汚した者は、自分の責任で綺麗にすることに無言の誓約ができています。そして用便者は次から次へと、順番を取り五人、六人と並んでいる。

平壤を出発してからもう十日は過ぎています。列車が停車すると、輸送捕虜の代表から「今日は一月一日、正月元旦である。そこで皆に雑煮を食べてもらおう。ただし餅は入っておらん、元気を持ち直す意味で餅なし雑煮だ。皆元気で頑張ってください」とのことだ。

いよいよ終戦の昭和二十年も暮れて、昭和二十一年になった。正月三日、漸く目的地に着き、ここで貨車から降ろされ整理させられた。輸送中の食糧不足や、余りにも輸送期間が長かったためか、皆衰弱しきって中には自力で立つておられない者もいる。

両隣の者がそれぞれ両腕を支え持って、辛うじて立っている。それでも容赦なく行進が始まった。その日は寒い寒い猛吹雪の日であった。自力で歩くことのできない例の者は、元気な者が交替で両腕を支え、引きずって歩いた。中には元気を出せと顔を殴る者もいた。そして交替した次の者も同じように殴る。鼻血が出て顔中が真赤である。正気では見られない凄惨なものである。そうでもして気を張っていないと、この寒さでは死んでしまう。

吹雪の中、どの位歩いたか頭目的地へ着いた。鉄柵を張りめぐらした収容所、ここは、延吉捕虜収容所であった。

〔編注〕

外山浅一氏のソ連軍越境参戦から終戦までの手記は、第七巻に掲載されております。